

女たち男たち

大相撲のあの九州場所をな、テレビで見たら、取組みの合間に会場の外景が映った。背景の港も。あの博多湾の夕映え。あれを見てな、ふと思いついたシーンがあるんだ。まだお前にも話してなかったな。聞きたいか？　じゃあ、女房には内緒だぞ。いや、別にやましい話じゃないさ。独身時代のことだしな。ま、ちよつと艶っぽい話というか。

三十歳の時にあの街の支店に転勤した。街の住人になってしばらくして、たまたまある小さなスナックにふらりと入った。客も少ないし、落着いた雰囲気に入った。

その三十半ばに見えるママがな、成熟好みの俺のハートのど真ん中さ。女優の何とかに似た、妖艶で品のあるルックスでな。俺に艶のある笑顔で、「時代劇の俳優さんみたいなお顔」とお愛想を言ってくれた。運命的なものを感じたよ。あはは。

ホステスは一人だけ。ちよい派手目な若い女で、あれはお前のタイプだったな。

あとはこれも若いバーテンが一人。このバーテンには顔じゃ俺も完敗だったよ。愁い顔の白皙の美青年つてやつ。で、俺が東京から来たと話すと、場が盛り上がってな。楽しい酒を飲んだ。以来、時々そこで夜を愉しむようになったわけだ。うん。

で、ママだがね、独身らしい。チークダンスしながら、耳元であれこれ囁いたりしてみたんだが、嬉しそうに忍び笑いは返しても、それ以上は乗って来ない。ある時、ホステスが俺に耳打ちしたもんだ。「ママはダメですよ。落ちませんよ」つてな。が、そのうち落としてみせるさ、と俺は思ってた。伊達に東京で女修業を重ねてたわけじゃない。

バーテンは物静かな男だったが、俺が行くといつも笑顔を向けてくれてた。俺が「君、もてるだろう」と言うと、「さあ、どうでしょう」と男でも惚れそうなきれいな微笑を浮かべた。こいつ、ひよつとしたらママの男か…とも思った。たまに来る女客たちもバーテンに色目を使うんだが、彼は端正な横顔で、クールに受け流してるだけだったからな。

で、ある晩俺は、たまたま店に来た外国人客と英語で雑談をした。そしたらな、バーテンが「高倉さん、英語が得意なんですわ！教えてください！」と。聞けば、いつかアメリカに住みたいんだと。「OK！」つてなわけで、その場でいくつかフレーズを教えたと、店の看板後に外で飲み直しながらやろうということになった。まだ開いてた居酒屋で英語日本語チャンポンで飲むうちに、二人ともかなり酔った。で、彼がぼろつと漏らしたんだ。

「高倉さん、ママは無理だと思えますよ。いつも恋人と一緒になんだからー」

「え？いつも一緒？…つて、どういうことなんだ？」

「店の中でも二人一緒じゃないですか。分かるでしょう？」

いや、これには驚いた。参ったね。ママとあのホステス…そうか、そういうことか。いやはや、それじゃ仕方ないな、と苦笑いする俺に彼が低いトーンで言った。「英語で、初めて会った時からあなたが好きだった…つて、何て言えばいいんですか？…」

適当に答えようとして、ふと目が、彼のそれと絡み合った。一瞬、その目の色で悟った。そうか、そういうことか、つてな。美しい顔の、美しい、リスキイな目だった。

そのあと？　そのあとは…酔いで記憶が飛んでるんだよ。まあ、三十年も昔の話さ。